2020. 7.13

M.K　さん

烤内脏“荷尔蒙烧”

日本漫画《小麻烦千惠》的主人公千惠是小学 5 年级学生，自己经营一家烤内脏（“荷尔蒙烧”）的店。

“荷尔蒙烧”是把牛内脏或猪内脏用酱油等调料腌制后烧烤而成的食物，咸中带甜。听说“荷尔蒙烧”的名字起源于大阪方言里的“放るもん（Hourumon）＝扔掉的东西”，因为这些内脏是人们平时不吃的东西。

大概 50 年前我上小学的时候，有的肉店就在店门口搭起了铁板和煤气炉，在那里现烤现卖动物内脏。当时用 10 日元就能买到，所以对小学生来说，真是物美价廉的小吃。

又咸又甜的酱料味道会勾起我的食欲，我经常拿 10 日元的硬币去买“荷尔蒙烧”。店主就抓小孩子拳头大一把“荷尔蒙烧”到袋子里，配着牙签卖给我。

我和我朋友肩并肩坐在附近寺庙的台阶上，一边随便闲扯，一边一口一口地吃“荷尔蒙烧”，对我们来说有种不可言喻的奢侈感觉。

我至今都忘不了那味道。那份勾起童年回忆的味道既填饱了我饥饿的肠胃，又让我的心情得到了满足。

（日本語訳）

■ホルモン焼き

日本の漫画「じゃりン子チエ」の主人公チエは、小学校５年生だが、自分でホルモン焼き屋を切り盛りしている。

ホルモン焼きとは、牛や豚の腸などの内臓肉を、醤油などで甘辛く焼いた食べ物である。通常は食べない内臓肉なので、大阪弁で「捨てるもの」を意味する「放るもん」から名付けられたという説がある。

もう５０年ほど前の話になるが、私が小学生の頃は、肉屋の店先に鉄板とガスコンロを置き、内臓肉をその場で焼いて売っていた。当時は、１０円でも買うことができ、小学生にとっては格好のおやつだった。

甘辛いタレの香りがとても食欲をそそり、１０円玉を握りしめてよく買いに行ったものだ。子どもの掌一握り程のホルモン焼きを紙の袋に入れて、爪楊枝をつけて売ってくれた。

友だちと近所のお寺の石段に並んで腰掛け、ダベりながら、ホルモン焼きをちびちび食べるのが何とも言えない贅沢のように感じた。

あの味は、今でも忘れられない。空腹と心の両方を満たしてくれる、思い出の味だ。